



むかし岡崎の地は乙見の荘と言いました。その名が生まれたのは伝説に十二代景行天皇の時代、二〇年にヤマトタケルノミコトが東国平定の為に大和の国を旅立たれて海の様になり、広い川が洋々と流れる里にお着きになりました。その東の高岩山に賊が居て人々を悩ますとお聞きになり、ミコトはそれを撃たんと矢作部に命じましたが、流れが速く渡りかねていたところに蝶が舞い来て、たちまち人となり竹を集めて一夜にして一万本の矢ができました。これををもって、その後この地を矢作と呼ぶようになりました。

ミコトは賊をことごとく撃ち従えた後に高岩山の南の岸辺に咲く菅の黄色い花をご覧になると清き流れのせせらぎの音に心を和まされました。ミコトはその土地を黄菅生の里、川の名を乙川（音川）兩岸の地を乙見の原と呼べと仰せになり、生まれた御子を乙見の王子と名付けました。ミコトがこの地を発とうとして岩の上に立ち、祈る時に一矢が流れ着きました。その矢を岩に突き刺すと八方に砕け飛び童子が現れ、東へ飛び立ちました。ミコトはこれを喜び矢をご神体に伊勢の大神を祀れと仰せになりました。それを吹矢大明神と称し当社は岡崎最古の神社です。後にこの川を菅生川、この地を菅生の里と呼ぶようになりました。